

長崎くんち 「龍踊り」「太鼓山(コッコデショ)」にみる色事情

Nagasaki-Kunchi Festival Affairs of Color in " JYAODORI ", "KOKKODESHO "

津田比都美 Hitomi Tsuda

つだひとみ生活デザイン事務所
TudaHitomi InteriorDesignOffice

沖 潤子 Jyunko Oki

キーワード：長崎、祭、色、陰陽五行、五色

Keywords : Nagasaki, Festival, Color,
Ying yan and five elements,
Five Colors

1. はじめに

長崎くんちは、国指定重要無形民俗文化財で長崎市民より「お諏訪さま」と親しまれている諏訪神社の秋の大祭で10月7日から3日間、長崎市内は「くんち」一色となる。特に奉納踊りは7年に一度廻ってくる当番町が踊町となり町の伝統演し物（だしもの）を奉納している。

その煌びやかさ、賑やかさは日本の祭りの中でも群を抜いている。ここでは、数多くの踊町の奉納踊りから人気の高い2つの演し物「籠町・龍踊り」「コッコデショ」について色彩との関連を検証してみた。

2. 長崎くんちとは

寛永11年(1634年)に二人の遊女(音羽、高雄)が、神前に小舞を奉納したのが始まりで長崎市民の氏神「諏訪神社」の祭礼へと発展してゆく。くんちの原意は、陰暦9月9日重陽の節句に催した事から9日「くんち」と呼ばれるようになった。9は、「陽」の変字であるため二つ重なる重陽の節句は、めでたい一番よき日として北九州地方の祭礼日に選ばれている。

寛永11年当時、長崎くんちの意義するところは拡大するキリシタン対策であった。長崎市民からキリスト教を遠のけるため、長崎奉行が政策の一環で諏訪神事を長崎一般市民の神事と認定した。また、長崎は当時日本唯一の国際貿易港で、対外的にも長崎くんちは、日本の神事の代表で日本人の精神的なエネルギーを示すものであった。奉行所からの援助と国際貿易港という利点で、長崎くんちは榮えに榮え、長崎市民にとってなくてはならない祭りとなったのである。

奉納踊りは、踊町による諏訪神社への奉納で、

7年一巡制で全ての踊りは、7年かけて完結する。奉納踊りの主なものは、本踊、川船、龍踊り、龍船、宝船、阿蘭陀万才、鯨の潮吹き、獅子踊り、コッコデショ、唐人船、等々賑やかなものになっている。

3. 「龍踊り」「太鼓山(コッコデショ)」祭りに登場する色彩

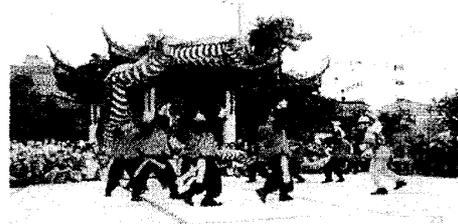


写真1. 籠町・龍踊り

龍踊りは、享保11年(1716年)に始まった。唐人集落の小さな祭りからヒントを得て籠町が独自に創作したものがこの「龍踊り」。日本の龍踊りの元祖である。龍の背中は、13種類、8000枚の手作りの鱗で出来ている。その作業は男性のみで行われる神聖な行事である。くんちが終わると鱗の8000枚は、バラバラにされ持ち帰りお守りにされる。重さ120キログラム。龍を操る龍衆は、11名(十一面観音の11から)。龍尾には、火炎。これは不動明王の火を表している。火の赤は、「猩猩緋(しょうじょうひ)」である。鮮やかで濃い深紅色、染料はコチニール、日本にはない色で江戸時代、貿易により輸入された染料である。長崎は貿易港であったためこの刺激的な赤を使用できたのであろう。現在は、人工顔料を使用している。

鱗の青は、代々継承されている色のみ使用している。鱗1枚をとり分光光度計で測色をしたところ、マンセル値で9.4BG 3.1/1.1であった。鱗の青の部分は、錆浅葱で先端は金で仕上げられており、腹の赤は紅赤、スカーレットで染色

されている。11名の龍衆の腰に下がっている黄帯は、“土”を意味し万物の生成と豊穡を祈願している。五行説からきているのである。

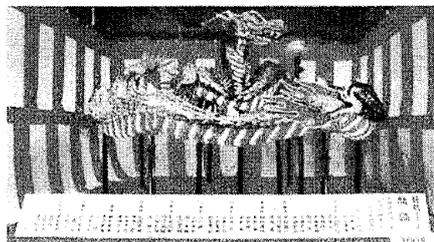


写真2. 青龍

青龍は、四神旗の青龍で頭は、東北（伊勢神宮）を見ているといわれる。龍踊りの龍衆の衣装は無彩色で宇宙をイメージしていて演し物の龍に迫力をもたせている。

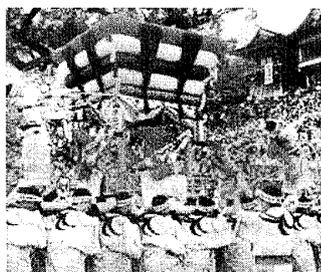


写真3. 太鼓山（コッコデショ）

コッコデショは、栴島町が寛政11年（1799年）に始めている。大阪堺から長崎へ航行した船の乗組員が、堺壇尻「ふとん太鼓」を奉納したのが起源で、長崎流に変化したものである。花車（だし）の上に五色の大座布団を積んで、担ぎ手40名が、1トンの花車を担ぎ、「ホーラアエーエー（宝来）」「コッコデショ（ここですよ）」の掛け声で花車を空に上げる豪快な演し物。

五色は、陰陽五行からきており民用五材の思想に基づいている。人間の生活に必要な水、火、木、金、土を5色、黒、赤、青、白、黄の座布団に見立てている。また、指揮者の采配にも赤、青、黄、白、黒の5色使用されている。寛政11年から使われており、こちらは季節の循環を表している。



写真4. 伝統の長崎刺繍を施した衣装

あらゆる奉納踊りで必ず廻りに陣取っている

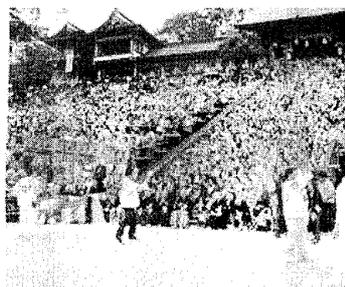


写真5. 白ドッコ



写真6. 唐人ぱっち

「白」の集団は、“白ドッコ”（ドッコ＝筒袖のはっぴ）と呼ばれ、江戸時代より公認の応援団で踊りに掛け声を飛ばし盛り上げていく。どうして白なのか、それは、神事であること忘れないためと演し物の邪魔にならない色であるため、長い間“白ドッコ”は、変化せず今日に至っている。

踊り町の役員の服装は、本番が終わると山高帽、“唐人ぱっち（股引）”、草履、黒紋付着物という出で立ちになる。西洋の山高帽を被り、中国の唐人ぱっちを穿き、日本の着物を着る、まさに長崎らしい組み合わせ衣装である。

衣装は、各踊町で意匠を凝らしている。今は、継承者が一人しかいないという立体感のある長崎刺繍を塩瀬緋色の布に施しているものや絹生地に新橋色の北斎大波をデザインしたものなど競って煌びやかさに磨きをかけている。各踊町共々、純色が多く使用され、目立たせるため補色使いも上手にされている。

4. まとめ、感想

「長崎くんち」は、日本の如何なる所でも見当たらない独自性を持っている。国際貿易港であったことで「和（日本）」「漢（中国）」「蘭（オランダ）」の文化が、流入し何処のものでもない融合の祭りとなったのである。それ故、日本の伝統的な色彩感覚とは違う、異国情緒漂う色彩文化を花開かせている。多色な色使いと煌びやかさは、定義できない自由さがある。しかし「長崎くんち」は、諏訪神社への奉納であるので陰陽五行思想から来る五色は、各演し物に引用されており、神事の一環であることを思わされる。

「長崎くんち」を通し、長崎文化の雄大さと長崎人の色彩感覚の素晴らしさを思い知らされた。

参考文献

- [1] 「熱撮！長崎くんち」 三好善夫撮影
- [2] 「祭りの歳時記」 新人物往来社